

2年1組

 ぼうけんしよう、はっけんしよう  
 ～ものを、たのしさを、くらしをつくる～


## 「べっそうは秋が一番似合うね」

10月中旬頃、2年1組のべっそうに一足早く秋がやってきました。運動会の頃から葉っぱが色づき始め、みるみるうちに紅葉が進みました。この時を逃すまいと、べっそうでの秋を堪能しました。「先生、ここに寝っ転がって見て」とOさんに誘われ5・6班が作ったウッドデッキに寝転ぶと夢のような光景が広がっていました。Uさんが「にじ色の雲みたい」と言っていたように緑・黄色・橙・赤・茶・・・と色づいた葉にお日さまの光が風に揺れてキラキラと光っていました。Rさんは観察日記に「じっと見ていると、にじ色のせかいにいっちゃんさうでした」とその時の様子や気持ちを表していました。この日は、給食もべっそう周辺で食べました。お花見給食とはまた違ったよさを感じました。外で食べるご飯は目に見えない自然のふりかけがかかるとまた一段と美味しく感じます。

べっそうづくりをして約1年が経ち、ようやくべっそうが1組にとって特別な場所になってきました。

11月に入り3・4班のレストランへ行き、「今日のメニューは何ですか」と聞くとRさん・Aさん・Nさんが息を揃えて「どんぐり唐揚げに、どんぐり天ぷらだよ」と教えてくれました。洋食だけではなく和食もできるレストランのようで腕を振っていました。5・6班のウッドデッキがあるのびりスペースに行くときすでに裸足になった女の子たちが葉っぱのお布団に寝転がっていました。Rさんが「私寝るね」というとKさんやMさんが葉っぱのお布団をどンドンとRさんにかけていきます。のんびりしていると頭の上から大量の落ち葉が降ってきました。べっそう周辺では競争するように落ち葉集めが行われており、一輪車に積んだ落ち葉が次々と運び込まれていました。1・2班のスペースに行くとき大きな落ち葉のお風呂ができており、そこで気もちよさそうに目を閉じているYさんの姿を見つけました。「気もちいいですか」とHさんがYさんに落ち葉のお湯を（葉っぱを）かけていました。「高級みたい」と見ていたHさんが言いました。「気持ちよすぎる。すごい。も一極楽です」とYさんが目を閉じたまま幸せそうに言いました。

べっそうの中心にはレンガの小道がありました。しかし、お布団やお風呂の囲いを作るため、そのレンガを移動させることになりました。するとレンガの下に

たのはカブトムシ(?)の幼虫でした。

次々にレンガを移動させていくTさんやOさん。「いない」「いない」と言いながら最終的に木の根元に敷いていたレンガの所へいき「やっぱ、ここが一番いる」と言って辺りを掘り返します。「どのくらい見つかった」と聞くとTさんは、「さっき40匹くらいで、今50匹くらいになった」と答えました。このような形で虫の観察ができるとは思いませんでした。こうして虫の観察が幕を開けました。

このように子どもたちは、それぞれの秋の楽しみを見つけ夢中になっていました。自分たちでつくったべっそうと自然の恵が融合し化学反応が起きたようでした。



## 大きく育った さつまいも

1組では春から栽培活動を行ってきました。10月中旬になり、5月に植えたさつまいもを畑に見に行くと、まだ青々とした葉っぱが畑一面に広がっていました。「森のようだね」とRさんが言っていたように畝の間は子ども達の胸あたりまで草が生い茂っていました。しかし、よく見ると葉が黄色くなっているものもありました。試しに一本抜いてみると顔よりも大きなさつまいもが出てきました。「こんなに大きくなっているから早く抜こうよ」と子ども達は抜く気満々になりました。数日後、改めて畑に行き一斉に抜き始めました。が・・・大きなかぶのようになかなか抜けません。あちらこちらから「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声と「先生、手伝ってー」と私を呼ぶ声がします。一本掘るのに5・6人で10分近くかかりました。とうとう1日では全部を掘り切ることはできませんでした。翌日、意を決して再び畑に向かいました。「もうだめだ、抜けない」と諦めかけた時もみんなで声を掛け合い、さつまいもと格闘し続けました。小さなピクミンのようなさつまいもから顔よりも大きなさつまいもまで80個近く収穫することができました。自然や植物の偉大さをさつまいもから改めて感じる事ができました。

5月



10月



11月・12月は収穫したさつまいもを使って、3回のおかしづくりを行いました。さつまいもチップス・さつまいも蒸しパン・スイートポテトなど回を重ねるごとに自分たちで手際よく安全に作る事ができ、大満足なおやつ作りになりました。

2年生になり、去年はできなかった調理活動をたくさんすることができました。実習生と作ったピザやお月見だんごの経験がさつまいもお菓子作りにも活かされていました。Aさんは「ピザの時もそうだったけど、どうして手作りだとお店よりもおいしいんだろう」とつぶやいていました。「レンガの時もがんばったけど、やっぱりがんばるって大事なんだね」とも話していました。

手や体を使って作ったり育てたりする体験的な学びは子どもにとってかけがえのない経験となり、その感触や感覚はその後に活かされる目に見えない肥やし(力)になると思います。また、栽培や調理を通して食べ物へのありがたいの心や食材を無駄にせず使い切る事の大切さなど実感できる時間となりました。

